
ダンデライオン

藤咲 希沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダンデライオン

【Nコード】

N1993T

【作者名】

藤咲 希沙

【あらすじ】

残されたノートは誰かへのメッセージ。あなたは誰？ 誰に宛てたもの？ダンデライオンは今日も大切な人へ想いを馳せる。 *サイトからの転載です*

第1話

そのノートを見つけたのは、暖かい日差しが心地よい春の日のことだった。

午後一番の選択授業で美術室に来た私は、窓際にある自分の席に着く。

仲良しの友人はみんな音楽を取っていて、この教室にはいない。

選択を間違えたかな、とつくづく思う。

だって、ここでは一人きり。

新しい友人も作れなくて、ただ一人の時間を持て余している。雑談に花を咲かせる他のクラスメイトたちを見ていると、ちょっと寂しくなった。

こんなことなら、みんなと同じように音楽にすればよかった。

音痴だとか楽器が苦手だとか、関係なく。

そもそも友人たちも、音楽が一番楽だからと選択していた。

だから、私もそう選択すればよかったのだ。

「あれ？」

視線を下に落としたときだった。

机の中からほんの少しだけノートがはみ出ている。

そっと取り出してみると、買ったばかりのような真新しいものだった。

パラパラとめくってみると、案の定ほとんどのページが真っ白だ。

「忘れ物かなあ」

でも、おかしい。

美術で罫線入りのノートなんて使わないのに。

真っ白のスケッチブックに、ただ好きな絵を描くだけ。

学期末に一つ作品を出せば、後は自由だ。

だから、授業が始まった今だって雑談が途絶えることはない。

いつだって賑やかな教室で、静寂を求める声もない。

そんな美術室で内職なんて……まあ音楽を聴いていれば、できるのかもしれないけど。

「あ」

スケッチブックも開かないまま、そのノートに見入る。

最初のページまで行くと、そこにほんの一行ばかり文字が並んでいた。

——ずっとあなたのそばにいます。White Dandelion

ただそれだけ。

「ほわいと、だんで……？」

直訳すると、白いタンポポ。

そんなもの、見たことがない。

タンポポと言えば、黄色。太陽の色。

ヒマワリよりもずっと、太陽に近いと思う。

少なくとも私の周りには、そんなタンポポだけだ。

「あなたって誰だろ」

たぶんその人へのメッセージだろう。

そう思ったら、なんだか見てはいけないものを見てしまったような気がした。

いや実際誰かから誰かへ宛てた手紙なのだから、見てはいけないのだけど。

私はそつとノートを閉じ、元の場所に戻した。

絵はもう少しで完成する。

これが完成すれば、今学期の作品提出の心配はなくなる。

スケッチブックを開くと、もうノートのことは頭から離れていた。

だからかもしれない。

翌週、そのままのノートを見たときに何故かドキドキしたのは。

まさか一週間経った今でも、そのノートが残っているとは思って
もいなかった。

第2話

誰も気づかなかったのだろうか。

あのメッセージを受け取る人さえ。

そう思うと、ちょっと可哀相に思えてくる。

また今週もこのノートは目当ての人を待つのだろうか。
見つけてもらえるまで、ずっと待っているのだろうか。

「もっとわかりやすいところに置けばいいのに」

受け取ってほしい人の机の中とか、ロッカーの中とか。
ここもその人の席かもしれないけれど。

…… ちょっとわかりにくいと思う。

そもそも誰に宛てたものかわからないから、目当ての人が見たとしてもきつと気づかない。

送り主でさえ、ちゃんとした名前ではないのだから。

悪いと思いつながらも、再びノートを開く。

片隅で交換日記でもしているのかもと思ったけれど、そんな形跡は全くなかった。

あの言葉以外の文字が増えていることもない。

悪戯書きさえ、なかった。

もしかしたら私以外見つけた人はいないのかもしれない。

「なんか、本当可哀相になってきたんだけど」

そう呟きつつ、机にノートを広げる。

ペンケースから愛用のシャープペンシルを出すと、それに芯先を置いた。

何か書いてあげよう。

そんな上から目線はあまり好きじゃないけれど、このまま放置するものなんか気分悪い。

違う方法に変えるように忠告するくらいなら、許されるかもしれないと思って手を動かす。

午後の眠たい頭は上手く働かない。

何度か書き直して、これなら相手も傷つけないだろう文章が書けた。

——たぶんメッセージを宛てた人は気づいてないと思うので、方法を変えた方が得策だと思います。

ストレートすぎて、逆に傷つくかもしれない。

「……まあいつか。ちゃんと事実を伝えることも優しさだよね」

そう言い聞かせて、またノートを机の中に戻す。

今度はこれを書いた人も諦めて、ここから移動させるだろう。

別の全く知らない人に読まれたなんて、私なら恥ずかしくてすぐに持って帰る。

このノートの持ち主も大方そうだろうと考えていた。

こんなところにこんなものを置く人だから、もしかしたらそうじゃないかもしれないけれど。

というか、私みたいな人だったら、そもそもそんなことしないか。誰かに見られると思ったら、恥ずかしすぎて置いていけない。

それが普通の授業ノートだったとしても。

「なんか嫌な予感……」

そういうものはどうしてだかよく当たるもので。

ノートは翌週もしっかりその場にあった。

中身にほんの少しだけ変化を残して。

—— やつと見つけてもらえたんだね。

ホワイトダンデライオンの目的は、さっぱりわからない。それどころか、謎は深まるばかりだった。

……この人が探しているのは誰なのだろう。

第3話

それから何度かノート上で言葉を交わしたけれど、向こうが自分の正体を明かすことはなかった。

いろいろと質問を変えて探ってみたけれど、見事にスルーされ続けている。

明かす気もないのだと思っていた。

間違つてノートを見てしまったただけなのだ。

相手がこんな交換日記染みたことをしたいのは、少なくとも私ではない。

男か女かもわからないけれど、私ではない他の誰かとするためにノートを置いていった。

これ以上、この中に侵食していくべきではない。

そう思っていた矢先だった。

——好きな人つていたりする？

向こうが待っていたのは私だったんじゃないか。

そんな勘違いをしまいそうなほど、的確な時期に送られた質問。

いつも通り報告だけの日記なら、そのまま放置することができたのに。

質問文で終わらせたメッセージを今寄越すなんて酷すぎる。

「返さなきゃ、後味悪いじゃない」

今までのやり取りに目を通す。

——今日は天気がいいね。居眠りしそう。

——帰り道に友達が犬に襲われそうになっていたよ。巻き込まれそうになって、大変だった。

——いつも合格してる小テストを落として、先生に呼び出されたよ。話長くて疲れた。

そんな何でもないような内容ばかりが並んでいる。

クエスチョンマークなんて、私が書いたところにしかなくて。

……本当に今回初めて、相手から質問文が回されたのだと改めて思い知った。

「これが、最後」

そう決めなくても、これが最後になることはわかっていた。

何の気紛れか、先生が突然席替えを言い始めたのだ。

新しい席を決めるくじはもう引いている。

どこになるかは来週までわからないけれど、また同じ席になることはないだろう。

もうこのノートを見ることも書くこともない。

……私が少し早く来るか、誰もいない時間にここに来るかしない限り。

そこまでの義理はないことはわかっている。

何も知らないのだ、お互いに。

お互いに深いところには入るべきではない。

——好きな人はいません。もうこの席に座ることはないの、これで最後にしますね。

そこまで書いて、手を止める。

最後の言葉を書くべきか、否か。

このままの流れで書いてしまうのは、少し寂しい。
数時間にも満たないやりとりをただけと言っても、関わったことには変わらない。

それでも終わりにするには……生温い終わり方はお互いの心残りを生むから。

——さようなら。また、会えたらいいですね。

「これもこれで、生温いかな」

そう呟きつつ、シャープペンを置いてノートを閉じる。
表紙は見つけたときのまま、何も書かれず汚れもほとんどない。
寂しい。

少なからずもこのやりとりを楽しんでいた。
だから、こうやって手放すのはとても寂しい。

「さようなら、白いタンポポさん」

ノートを机の中に入れて、私は終わりにした。

……はずだった。

第4話

翌週、黒板に書かれた座席表を頼りに新しい席に着いた。
前の席から大分離れて、今度は廊下側の席。
もうあのノートを見ることもない、そう思っていた。
それもすぐに打ち碎かれる。

「な、な、なんで……」

新しい席の机からほんの少し見えるのは、見覚えのあるノート。
あるはずのないそれに、思わず身震いをしてしまった。

——放課後、ここで。

一段と短いメッセージは、これまた一段と意味がわからない内容だった。

いや、言いたいことはわかる。

でもそれをなぜ、私に……。

「そっか……私、宛じゃないんだ」

どうしてまた私の席にあったのかはわからないけれど。
最初から私じゃない誰かに宛てたものだったのだ。

……偶然が重なっただけ。

これは私へのメッセージではない。

私はそれに対する返事を書かなかった。

もう終わりにすると決めたのだ。

この後続くのは、私じゃない誰かの言葉。

私がそれを遮ってはいけない。

「さて……早く終わらせて、新しいのでも描こうかな」

次は花にしよう。

まだ見たことのない白いタンポポを黄色いタンポポの横に並べてもう春は過ぎてしまったけれど、この気持ちが残せるのならそれでもいい。

今心に溜まっているものをその絵に描き込めばいい。

全部描き込んでしまえば、きっと何もかも終わりにできる。

楽しかった思い出だけを残して、この曖昧な気持ちは忘れられる。そうありもしないことを思い、ノートから目を逸らした。

私は見えないふりをしていただけだ。

そこに生まれたものに気づかないふりをして、奥深くに隠しただけ。

だからかもしれない。

ずっとあのノートが心に引っかかって、忘れることなんてできなかった。

ずっとずっと気になっていて。

無意識に動けたらよかった。

そうすれば、こんな葛藤もしなくて済んだのに。

本当は誰に宛てたメッセージだったのか、誰のノートだったのか。知りたいけど、知りたくない。

でも、今こうして歩いているということはそれを知りに行くということ。

無意識だったらよかったのに。

そんなことができるはずもなく、私は私の意志でそこへ向かう。

ノートを見たのは三日前。

今日、そこで会えるかどうかはわからない。
でも、どうしてもか会えるような気がしていた。

第5話

敢えて今日を選んだと言っても過言ではない。

美術部の活動は週三回。

今日はその三回に入らない日だった。

誰もいないことを知って、そこへ向かう。

会いたくない気持ちが大きかったのだろう。

誰も会わないから、この日を選んだ。

そのはずだったのに。

「こんにちは。待ってたよ、川崎さん」

誰もいないはずの美術室には、私も見たことがある人の姿があった。

彼の名前は、宇都木春馬。

二つ離れたクラスの人だが、その噂は私のクラスまで届いていた。

少し大人びた表情を浮かべる姿は思わず見惚れてしまうほど整っている。

私が近づくような人ではない。

そう思って今の今までしっかりと見たことはなかったけれど。

「川崎さん？」

向こうは私のことを知っていたようだ。

はっと気づいたときには、目の前まで近づいていた。

「なんで……」

「それは何のなんで？」

からかうような笑みを浮かべて、彼は首を傾げた。
何の、なんてたくさんある。

どうして私を知っているのか。

どうして私の名前を知っているのか。

どうして、今日ここにいるのか。

あと、あのメッセージは誰に向けたものなのか。

「そりゃ川崎さんが好きだから」

「え、あ、あの」

「もちろん、これも君宛だよ」

彼の手にはあのノートが握られていた。

それを私の目の前でちらつかせながら、とても楽しそうに笑う。

そして、とても嬉しそうに。

どうしてなのかは考えたくなかった。

考えても到底理解できそうにもない。

……って、私、何かを忘れているような気がする。

とても重要なことを。

「とっても鈍感なのは知ってたけど」

「え？」

「告白をスルーされるのは結構堪えるな。意外と」

そう、告白されたのだ。

思い切りスルーしてしまったけれど、初めて告白された。

初めてということは、この後どうすればいいのかもわからなくて。

「まあ、こうなることは予想してたけどね」

頬を引きつらせながら苦々しい笑みを浮かべた彼に、ほんの少し
申し訳なくなった。

第6話

「俺が君を好きなことは理解できた？」

「う、うん……それは何となく」

自分ながら酷い言葉だなと思った。

でも、どうして私を好きになったのかわからない。

好きになってももらえるような出来事もなかったはず。

私は彼を意識的に避けていたのだから。

だから、何となくしか理解できなかった。

「川崎さん」

「は、はい」

「由奈って呼んでもいいかな。ダメ？」

可愛い名前だね、と付け加える。

そんなことは言われ慣れてないから、思わず顔が赤くなってしまった。

「可愛い」

「み、見ないで」

「どうして？ やつとここまで近づけたのに」

彼の手が髪に触れる。

振り払わずにいると、嬉しそうに目を細めた。

何がそんなに嬉しいのだろうか。

それがわからなくて、私も手を伸ばした。

彼は少し驚いたような顔をしたけれど、それを振り払ったり避けたりすることはなかった。

されるがまま、受け入れるというように、目を閉じる。
その頬に触れると、ほんのりと温かった。

「嬉しいな」

「え？」

「抱きしめていい？」

持っていた鞆が落ちる音が聞こえた。

返事をする間もなく、その両腕に捕らわれる。
嫌だとは思わなかった。

それが、ちょっとだけ不思議だった。

「逃げないんだね」

ほっとしたように彼が言う。

首にかかる息がくすぐったい。

でも突き放すことはなかった。

空になった手を彼の背中に回す。

触れるか触れないかの微妙なそれを、彼はしっかり感じたようで。

「嬉しいことばかりしてくれるね」

「嬉しい？」

「うん。由奈が俺を見つけてくれたから」

ずっと私を探していたらしい。

それがいつからかわからないけれど。

私が彼を知ったのは高校でだから、きっとここ一年のことなのだろう。

「中学の頃から探してたから」

「ええっ」

やっぱり覚えてないのか、と言った彼はそれでもなんだか嬉しそうだった。

第7話

あれから場所を移動して、ここは駅前のファストフード店。
向かいに座るのは、今日会ったばかりの宇都木春馬だ。

黙々とポテトを頬張る姿も絵になっている。

「かっこいい人が何をやってるかっこいいのはこういうことだろうか。」

「それで、思い出してくれた？」

「な、何を？」

「何をつて……俺と出会ったときのことだよ」

呆れたように言う姿もかっこよくて、ちょっと悲しくなった。

私がそばにいていい人ではない。

もっと彼に似合う人がいる。

そう言ったら、彼はどんな表情をするのだろう。

どんなことを言ってくれて、どんなことを思ってくれるのだろう。

少しでも寂しい表情を浮かべてくれればいい。

少しでも、怒ってくれればいいけれど。

「今、変なこと考えただろ」

「へ」

「顔に出てる。すぐ出るよね、由奈は」

「考えてない……よ」

俯いて、顔を隠す。

「すぐに顔に出るといふのは信じられないけれど、もし本当なら気分悪い。」

彼の気分も悪くしてしまうかもしれない。
そういうことを考えていることは十分理解していた。

「俺と由奈が初めて会ったのは三年前、中二のときだよ」

それぞれ違う中学に通っていたけれど、会わないこともなかったらしい。

彼は生徒会に入っていた分、近くの中学に行くこともあった。
もちろん私が通っていた中学にも。

「こんな見た目だから、その頃からまあいろいろとあつてね」

「人気者だったってこと？」

「今よりも酷かったけどね」

そんなとき、彼は私と出会った。

覚えてないけれど、話しかけたのは私の方からだったらしい。

熱烈なファンに追われて隠れていたなんて、本当に漫画のような話だ。

「そのとき、由奈が言ってくれた言葉が嬉しくてね。それから、ずっと好きだった」

高校に入ったときはまだ私が同じ学校にいと知らなかった。

それもそうだろう。

目立つようなこともないし、部活に入ってもいない。

同じクラスにでもならなければ、気づくことも難しいだろう。

そう考えると、同じクラスにもならずに見つけた彼は結構すごいのかもれない。

「私、何を言っただんですか？」

まだそのときのことは思い出せない。
私はあの頃彼に何を言ったのだろう。

「じゃあ、私はあなたの友達になりたいな」

偉そうなことを言っていなければいいと願ったけれど。
案の定、そんなことを口にしていたらしい。
でも彼はそれがよかったんだと微笑んでくれた。

第8話

にこにこ微笑む彼を見つつ、ストローからオレンジジュースを飲む。

嬉しかったのはよくわかったけれど、それで好きになるのだろうか。

恋愛的な好きにならないって言ったからこそ、嬉しかったのではないだろうか。

「由奈、返事」

「返事？」

「告白しただろ。理解したって言ったよね」

言ったような気もしなくもない。

すっかり忘れていたけれど。

「忘れてたって顔してるね」

別にいいけど、という彼はどう見てもそんな顔をしていない。笑みは残っているけれど、自嘲染みたものが混じっていた。

そう言えば、告白されるのは初めてかもしれない。

覚えている限りでは、男友達さえいなかったような。

いたとすれば、目の前の彼くらい。

忘れていた上に、まだはつきり思い出していないけれど。

「あの」

「ん？」

「友達でよくない？」

そう言った瞬間、彼の顔から笑みが消えた。
本格的に不貞腐れたようだ。

「へえ、俺が告白したのに」

「だって友達になるっていうのが嬉しかったんでしょ？」

「俺が好きになったんだから、友達じゃダメなの。わかる？」

わからない。

わかりたいと思えない。

それって勝手なのではないだろうか。

私の頭が硬いだけで、普通はこうなのだろうか。

「由奈、好きだよ」

「う、うん」

「好きなんだよ」

この後、私ははっきりと答えを出さないまま、彼と別れた。
最後の最後まで好きだと連発した彼は、噂とは全然違う人だと思
った。

噂ではもつとぶつきらぼうで、クールな人だと聞いていたのに。
私が見た彼は、いろんな意味で甘い人。

「なんかなあ」

遠くなる彼の背中を見つめながら、小さく漏らす。
まるで夢のような現実ってこういうものなのかもしれない。
ほんの数時間前まで関わりのなかった人が、私に笑いかけて、好
きだと言った。

放課後、美術室に向かっている私には想像もできなかったこと。

心の奥がほわほわして不思議な感じがする一方、もしかしたら妄想してただけなんじゃないかって恥ずかしくなる。

「これって、現実だよね……」

彼と別れてしまった今はもう確認できない。

次に彼と会うまで、このもやもやは消えないのだろう。

その日の夜、私はずっと彼のことを思っていた。

そうなるように仕掛けられたんじゃないかって思わず考えてしまっくらいに。

第9話

ホワイトダンデライオンと名乗った彼に会った翌日、道端でタンポポが咲いているのを見つけた。

それはどこにでもある、鮮やかな黄色い花。

白いタンポポとはどんなものなのだろう。

黄色いそれはとても強かに見えるけれど、白くなるとどんな風に映るのか。

想像してみてもか弱いイメージにしかなくて。

それが彼とどんな風に繋がっているのか、全く思いつかなかった。

「で、考えてくれた？」

昼休み、奈穂とお弁当を広げていた私の前に彼は現れた。

空いている椅子を引っ張ってきて、当たり前のように輪の中に加わる。

体中を感じる視線がとても痛かった。

「う、宇都木くん？ え、由奈、どうゆうこと？」

「由奈に告白したんだ、俺。よろしくね、由奈のトモダチさん」

珍しくニコニコと微笑む彼に黄色い声が止まない。

それが高まると同時に、私への嫌味も酷くなる。

目の前の奈穂に至ってはキラキラした視線を向けてくる。

きっとこの状況を楽しんでいるのだろう。

元々こういう恋沙汰が好きな彼女だから。

どうしてこんなことに。

非難の目を彼に向けたが、返ってくるのは甘い笑みばかり。

「由奈、玉子焼き貰っていい？」

「……ダメ」

「じゃ、由奈ちようだい」

「もっとダメだから」

伸びてくる手からお弁当を守りながら、きっと彼には周りの声なんて聞こえていないのだろうと思う。

もしかしたら奈穂でさえ視界に入れてないのかもしれない。

その証拠に、あれ以降一切彼女に意識を向けていない。

「けち」

「けちって……」

拗ねたようにそっぽを向くと、周囲の雰囲気がちよっと悪くなっただ気がする。

「あーあ。由奈ったら、ファン全員敵に回したんじゃない？」

「大丈夫、由奈は俺が守るから」

いつそ関わってくれない方が安全だと思っんですが。

そんな言葉をお茶と一緒に飲み込み、私は今までにないくらい大きなため息をついた。

……昨日から災難すぎる。

第10話

それから彼はよく教室に現れるようになった。

主に昼休みと放課後。

たまに一緒に帰ったけれど、ほとんどは教室で雑談をするだけだった。

一緒に帰る日は奈穂と帰るときだけで、彼も彼なりに気を使ってくれてるのかもしれない。

二人きりになることは、あのとき以来一度もなかった。

「春馬くんって由奈にだけは甘々だよな」

三人になる場面が多いから、奈穂もすぐ彼と打ち解けた。

今では私よりも奈穂と会話していることが多い。

それはそれで楽しかったけれど、なんだか不思議な気分にもなった。

「そうかも。由奈、可愛いから」

二人の会話がいつも私のことだから、そんな気分になるのかもしれない。

「好きな人には尽くしちゃう感じ？」

「まあね」

「意外！。いいなあ、私も尽くされたい！」

「奈穂ちゃんならすごいいい人に出会えるよ」

「だいたいけど」

今日も半分呆れた状態で二人のことを見ている。

放課後になってしばらくした教室には私たち以外誰も残っていない

い。

以前は何人が残って自習したりおしゃべりしたりしていたが、私たちが残るようになってからはそそくさと帰ってしまうようになった。

内容も内容だし周囲お構いなしに話すから、もっと静かで落ち着いたところに移動するようになったのかもしれない。

ちよっただけ申し訳ない気分。

「……でいい？」

「え？」

「だから、今日二人で帰っていい？　って」

突然話を振られて、内容を理解するまでに数秒を要した。

二人でって……彼と奈穂が？

「まさか。由奈と俺に決まってるでしょ」

「ええっ」

「じゃ、そうゆうことで」

「うん、また明日ねー！」

まだちゃんと返事もしていないのに、奈穂はさっさと帰ってしまった。

残されたのは私と……彼。

このままバラバラに帰るのもおかしくて、結局彼の要求通り二人で帰ることになった。

学校を出て、暫く無言のまま二人は歩いた。

いつも彼と別れる交差点もそのまま過ぎてしまっ。

「あっちじゃなかった？」

「今日は家まで送ってくから」

断つてもついてきそうだったので、そのまま歩く。
さっきまであんなに話していたのに、今はその面影もないほど口
を閉ざしたまま。

「なんで……」

「ん？」

「なんでホワイトダンデライオンなの？」

沈黙に耐え切れなくなった私はずっと抱えていた疑問を彼に打ち
明けた。

第11話

彼はちよつとだけ苦い顔をして、私から目を逸らした。

「……笑うなよ？」

「え？ あ、うん」

「俺、意外とロマンチストなんだよね」

予想外の言葉にきよんとする。

それがどう私の質問の答えになっているのか、さっぱりわからない。

「白いタンポポって見た事ある？」

彼の言葉に首を横に振る。

「シロバナタンポポって言ってさ、西の方だとよく咲いてるんだって」

「へえ……」

彼はその花を見たことがあるんだろうか。

鮮やかな黄色ではない、白い花びらを。

「その花言葉が俺にぴったりで。だから、ホワイトダンデライオン」「花言葉？」

「そ。花言葉調べるなんて意外とロマンチストだろ？」

確かにそういうのは女の子の方が好きそうだな。

彼にはちよつと……意外かもしれない。

「その、シロバナタンポポの花言葉って何？」

彼にぴったりだから、クールとか人気者とかそういう感じなのだろうか。

でも、白いタンポポだから儚いとかかもしれない。

そういう雰囲気もない訳ではないし。

彼は少し赤くなった頬を掻きながら、恥ずかしそうに笑った。

「内緒」

それから何度も聞いてみたけれど、一切ヒントさえも与えてくれなかった。

そうこうしているうちに、私は家の前に着く。

「ここが由奈の家なんだ」

「結構遠くない？ 帰り、大丈夫？」

「平気。俺、男だし」

少し心配になった私を安心させるように笑って言った。

本当に大丈夫なのだろうか。

生憎彼の家は知らないし、あの交差点からどれくらいの距離があるかもわからない。

「大丈夫だって。由奈が気にすることじゃない」

「でも……」

「由奈、好きだよ」

唐突な告白に私は言葉を詰まらせる。

今はそんな話をしているのではないのに。

でもその直後に浮かべた彼の笑みがとても優しくて、文句なんて言えなかった。

「なんかストーカーみたいだけど、由奈の家が知れて嬉しい」

「……ならいいけど」

「また、送らせて。……あと、いつか迎えに来ることも許して」

そう言った彼は私の頭をくしゃっと撫でて、元来た道を戻っていった。

私は何も返せないまま、その背中を見つめることしか出来なかった。

最終話

彼の姿が完全に見えなくなってから、私は家の中に入る。

そしてそのまま階段を駆け上がり、自分の部屋に入ってパソコンの電源を入れた。

鞆をベッドの上に放り投げ、パソコンの前に座る。

花言葉ならインターネットで簡単に調べられる。

何を見てその花言葉を知ったのかわからないが、彼が自分にぴったりだと言った言葉は見つかるかもしれない。

「シロバナタンポポ、だったよね」

慣れた手つきで検索窓に打ち込み、ボタンをクリックした。

検索結果は六百件ほど。

上から順にサイトを開いて、花言葉だけを見ていく。

そして、おそらくこれだろうという言葉を見つけた。

あのノートを見つけてから、季節が一つ過ぎた。

彼に再会して告白されてから、もう一ヶ月が経とうとしている。

告白をつやむやにする気はなかったけれど、心のどこかでそうなればいいと思っていたのかもしれない。

だから今、早く彼に会わなきゃと思っているのかもしれない。

次の日、私は焦る気持ちを抑えて、いつもよりゆっくり家を出た。遅刻にならないよう時計を気にしながら、学校までの道のりもな

るべくゆっくり歩く。

ギリギリで教室に入った私を奈穂は不思議そうに見ていたけれど、ただ苦く笑って誤魔化した。

彼と会うのは、昼休み。

それまであと数時間しか残っていない。

奈穂には昼休みに席を外してもらうように頼んだ。

二人で話したいことがあると言ったら、頑張れと返してくれた。

きつと告白の返事をするのだと思っっているのだろう。

そして、その答えが肯定だと。

「話？」

昼休み、奈穂の携帯が鳴って、それを耳に当てながら教室を出ていった。

おそらく彼女はわざと携帯を鳴らして席を外したのだろう。

じゃなきゃ、こんなタイミングで電話なんてかかってくるはずがない。

わざわざそんな演出をしてくれた奈穂に感謝しつつ、私はすぐに話を切り出した。

「うん……あの後、ネットで調べたんだ」

「何を？」

「シロバナタンポポの花言葉」

彼は驚いたように目を丸くしてこちらを見た。

もしかして、あの流れでさらっと流してくれるとも思っていたのだろうか。

探して欲しいと言っているも同然の会話だったのに。

「……調べたんだ？」

「うん、いろいろあつたけど……これかなって」

揺れていた視線を彼に戻し、私はゆっくりと言葉を紡いだ。

「私を探して、そして見つめて」

真心の愛とか思わせぶりも候補に挙げていたけれど。

この言葉を見た瞬間、これだと思った。

自分でロマンチストだと言った彼にぴったりのはこの花言葉だ、と。

「当たり？」

「……悔しいけど、当たり」

恥ずかしそうに笑って顔を伏せた彼は、耳までほんのり赤くなっていた。

「あー、実際知られると超恥ずかしいな」

さらさらの黒い髪をガシガシと掻き回す。

私がじっと見ているのに気づくと、さらに頬を赤くした。

「見んなよ」

「見なくていいの？」

「い……っ、くない」

そう言つと彼は頭をぶつけるような勢いで机に伏せた。
見た事もない姿に、可愛いなんて思ってしまった。

「まあ……探すのは無理だったけど」

私の言葉に首だけを動かして、こちらに顔を向ける。
不思議そうなその表情に、ちょっとだけ笑ってしまう。

「見つめるのは、これからでもできるから」

告白の返事はまだできない。

でも、きっと私は彼を好きになると思う。

こんな可愛い人に想われて、好きにならないなんて逆に難しい。

「明日迎えに来てくれると、嬉しいな」

恥ずかしくて逸らしてしまったから、その表情は見えなかった。

「もちろん」

そう答えた彼は、きつと今まで以上に幸せな表情だといひ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1993t/>

ダンデライオン

2011年5月17日21時50分発行